

〔経済学会学術講演会〕

2011年11月17日 14：40～16：10 九州国際大学KKIUホール

いま、働くということ

橘 木 俊 詔

(同志社大学経済学部教授)

野村経済学部長 みなさん、こんにちは。経済学部長の野村です。本日は同志社大学経済学部橘木教授をお迎えして、経済学会学術講演会を開催することになり、経済学部長として一言申し上げたいと思います。今日お迎えする橘木先生は、今から5年ほど前に『格差社会』という御本を岩波書店から出版されております。この本は、当時非常に話題になりました。1970年代から1980年代頃は、日本社会は中流層が多くて、当時「一億総中流」という言葉がありました。中流の人が大部分を占める社会であるということが言われていたわけですが、2000年頃になりまして、「いや、格差があるじゃないか」という話になりました。橘木先生が出版された『格差社会』という御本から、非常に大きな論争が巻き起こりました。たとえば当時、格差が広がったのは「グローバル化の影響で仕方がない」だとか、あるいは「小泉純一郎内閣が始めた構造改革の影響で格差が広がっているのだ」とか、いろんなことが言われて論争になっておりました。本日お迎えした橘木先生は、そもそもこうした論争の出発点となった方ですから、こういった格差問題について非常に興味深いお話を聞くことができるのではないかと期待しております。以上、簡単ではありますが、あいさつと代えさせていただきます。

齋藤准教授 学部長ありがとうございました。それでは私の方から本日の趣旨説明、及び講師の紹介をいたします。経済学部学術講演会は、主に学生のために学識経験がある方をお招きして、今話題になっていることについて、非常に易しい解説をいただくというものです。本日お招きしております橘木先生は、いま学部長のご紹介にありましたように、格差社会及び労働経済学の第一人者です。ご略歴は、1943年兵庫県生まれ、アメリカのジョーンズ・ホプキンス大学大学院の博士課程を修了し、Ph.D.を取得され、その後ヨーロッパ諸国やアメリカでの研究・教育を経て、京都大学で教授となりました。私は橘木先生の弟子ですので、本日お招きできて非常に喜んでおります。現在は同志社大学教授です。先生はたくさんの本を書いておりますが、いま、橘木先生と私で『スポーツと学歴』という本を書いております。先生は、スポーツを非常に愛されております。この大学はスポーツをしている人が多いので、その意味でも親しみをもってもらえると考えています。それでは橘木先生、よろしくお願いいたします。

橘木教授 只今、ご紹介にお預かりいたしました、同志社大学の橘木と申します。今日は皆さんの前で話す機会を与えていただき、厚く御礼を申し上げます。実は、齋藤隆志さんは私の教え子ですし、もう一つ感傷的なことを言わせていただきますと、私の父親はこの北九州の大学を出ております。戸畑の九州工業大学で電気工学を勉強していました。したがって同じ北九州市にある大学から呼ばれたので、父親はもう生きてはおりませんが、喜んでまいりました。

もうひとつ、先ほど齋藤先生が私がスポーツ好きだと言われたので、それに関する逸話を申します。齋藤先生が私の指導を受けるために、私の京大の研究室にいられたとき、自己紹介で「齋藤隆志です」と言ったんですが、私は横浜ベイスターズの「斎藤隆」と同じ名前だなというふうに答えました（笑）。みなさん「斎藤隆」ってご存知ですか？いま、ウィスコンシン州のブルーワー

ズ¹にいる「斎藤隆」というのが昔は横浜ベイスターズにいたんですね。

こういう逸話があるほど私はスポーツが大好きでして、齋藤先生が言われたように『スポーツと学歴』という本を書いています。これに関連して北九州を思い出したとき、一つの学校が出てまいります。それは、小倉高校です。昔、戦争直後、野球が好きな人であれば小倉高校は非常に甲子園で活躍したことをご存じであると思いますが、そこに小さな大投手、福島というピッチャーがいて、体は小さいけれども甲子園で優勝投手になったという、みなさんが生まれる前のことですが、そういう話も北九州にはございます。今の話をすれば、みなさんの付属高校が非常に甲子園で強いと。私は、実は甲子園球場のそばで生まれたんですよ。兵庫県西宮市に甲子園球場があるのですが、もう生まれる前から阪神タイガースと高校野球が大好きでした。したがって先ほど言った福島投手を甲子園で見えております。非常に小さなピッチャーだったんだけど非常に良い投手だったということを目の当たりに覚えております。もうひとつあえて言えば、甲子園球場と言えば虎（阪神タイガース）ですから、虎キチでございました。みなさんの中で阪神タイガースファンはいますか？ちょっと手を上げてください。やはり少ないなあ。やっぱりこの地域は、某福岡の球団ファンが多いんでしょうな。もう阪神タイガースの話は止めます。みなさんあまり野球の話に関心がないと思いますので。もうひとつ先ほど言いかけたことですが、みなさんの付属高校が甲子園球場に出てこられて活躍したのは私、目の当たりにして見ております。というわけで、私は高校野球と阪神タイガースの大ファンでありますということを申し上げて、今日の話の本題に入りたいと思います。

1 講演時点の所属。2012年はアリゾナ州のダイヤモンドバックスに所属している。

はじめに：講演の概要と構成

「いま、働くということ」という本をいま、私手元に持ってまいりました。この本を2カ月ぐらい前に出しまして、会場の入口に行きましたらこの本が販売されていることに気がつきましたので、もしみなさん今日、私の話が面白かったと、もうちょっと読んでみたいなと思った方は入り口でご購入いただけたらと思います。今日の橘木の話はつまらんと、しょーもないことしか言っていないと思われたら買わなくても結構ですが、もしそう思われたなら販売中であると最初にちょっと宣伝をさせていただきました。

お手元の資料に、この本のはしがきと目次が書いてあります。はしがきを読んでもいただくと、どういうことを本がいつているかというのと、「人間って何のために働くのか？」と。で、「働いて本当に幸福なのか？」「働くのは辛い」とか、「俺はできれば働きたくないな」とか、「働かずして誰か食わしてくれたら一番いいな」という人をどう考えればいいのか、というようなことをこの本で書いてあります。みなさんも大学で勉強されて卒業しましたらどこかへ就職しますよね。どこかで働いて所得を得ないといけな。みんなすべての人がそれをやらないといけな。のだけれど、働く職場がつまらないかもしれない。自分をもっと別の会社で働きたいと思ったんだけど、なかなか採用してもらえなかったの。別の企業で働きたいと思う人がいるかもしれない。あるいは働くのが辛い、朝9時に起きて夕方6時まで働かされてクタクタになって、家に帰ったらバタンキューというような人生を俺は、私は送りたくないという人もいるかもしれない。働くのがいやになる人は実は世の中にはいっぱいいます。そういうふうに働くのがいやになったときに、どう考えれば再び働く気力が起きるかということがこの本には書いてあります。

で、そのようなことを昔の歴史家や哲学者がどのような見方をしてきたかということから始めます。最初はちょっと難しい話になりますが、後半は私が先ほど言ったような、「働くのがいやなんだがどうしたらいいんだ」というような問題に移りたいと思います。

1. 偉人は働くことをどう考えたか

では、まずレジュメの目次を見てください。「偉人は働くことをどう考えたか」というのが第一章です。ギリシャ・ローマ時代から現代まで働くということはどう考えたのか、特に哲学者たちはどう考えてきたのかということをごく簡単にご紹介します。

まず、「1. 古代ギリシャの労働観」。みなさん古代ギリシャ・ローマが文明の始まりだということはご存知ですよ。古代ギリシャで働くということがどのように考えられていたかを、ごく簡単に説明いたしますと、以下の通りです。昔の人は二つの階級がありました。ひとつは特権階級であるギリシャ市民といわれるグループ、もうひとつは奴隷といわれる人たちのグループです。そして、市民たちはこんな勝手なことを考えました。「俺たちは働かない。働くのは奴隷だ」と。その代わり、市民というのはどのようなことをやったかという、奴隷に賃金は払うけれども働かせて「奴隷」というくらい非常に苦しい立場に追いこむ。で、上の階層にいる市民は働くのはしない。なぜか？働くのは卑しいことだと考えたのです。奴隷という人たちのみが働くのであって、市民は働く必要が無い。俺たちは特権階級だから、働くのは奴隷にやってもらって、自分たちは奴隷から搾取して生きる。そして、いろんな自由な思想や哲学を語りましょう。というのが、市民階級の姿でありました。まとめますと、市民階級は働かずに、「働くことは卑しいことだ。普通の市民がやるべきではない。しかも仕事は辛い。辛い仕事は奴隷にやらせて、我々は奴隷から得たものを食べる」ということを考えたのがギリシャの人たちの思想でありました。似たような話はローマでもありました。みなさん、世界の文明は古代ギリシャ・ローマから始まったということを知っていると思うので、そういう古い時代の話からさせていただきました。

その後、キリスト教が出てまいりました。ギリシャ・ローマ帝国が滅び、今度はキリスト教の世界になってきますと、働くということに関して非常に重要

な影響を与えました。それはどういうことかという、「働くということは尊いことだ」というのがキリスト教の出発点でした。そして、働くということは人間の義務であるし、食べていくには全員が働かなければならない。そして、もし不幸にして食べることが出来ない人、あるいは働けない人がいたら、キリスト教の思想は「働いて自分で稼いだ分を働けない人に貢ぐ」ということが非常に崇高な思想であるということをいいました。したがって、ここで働くということに関して非常に大きな転換がありました。キリスト教は、「人間は生きるためには働かないと駄目なんだ。そして、恵まれない人がいたら自分で稼いだ分の一部を貢ぎなさい。」という教えで、それがみなさんの知っている「博愛主義」という言葉の出発点であります。このような意味で、キリスト教が出てきたことで、ヨーロッパにおいて「働くことは人間の義務である」という思想が広まったということを理解してください。これが「2. キリスト教的労働観」というところでございます。

それから、ヨーロッパでどのようなことが起こったかということ、中世を経て近代に至ります。イタリアとかそういうところの歴史的な発展があり、いよいよ経済が徐々に豊かになっていきました。基本的には中世は、農業だとか手工業の時代ですから、そんなに大きな生産活動は無かったのですが、中世が終わって15～6世紀になりますと、徐々に商業とか工業が盛んになり、それとみなさんをご存知のようにヨーロッパが新大陸を発見して、新大陸との貿易をやるという重商主義といわれる時代になりまして、徐々に経済が豊かになってまいりました。そこで起きたことはどういうことかということ「やはり人間は生きていくためには働かなければならない。なんらかの労働をやって食べていかなければならない」という思想が徐々に強くなってまいりました。

そして、その後何が起こったかといいますと、みなさんも経済学部の学生であれば産業革命が起こったということが記憶にあると思います。17世紀・18世紀のイギリスを発端にして産業革命という時代を迎えました。まさに綿工業だとか羊毛工業だとか、そういうような非常に強い経済がでてまいりまして、こ

ここで新しい労働観というものが出てまいりました。それが「3. 近・現代の労働観」というものです。経済を強くするにはみんな一生懸命に働かなければならない、というような意識が非常に強くなってきます。

産業革命が起きたときに、二つの重要な価値観が生まれました。それは、「勤勉」と「儉約」という考え方です。勤勉というのは「一生懸命働きなさい。一生懸命働いたらあなたは報われますよ」ということで、一生懸命働いたら高い賃金を得られるし、おいしいものを食べられるし、きれいな物を着られる、というようなことが非常に重要な価値であるというようにみんなが考えるようになりました。もうひとつの重要な価値は「儉約」で、「無駄遣いをするな。華美な商品には走るな」ということです。なぜ「儉約」がいいのか？「儉約」は、現代の言葉で言えば「貯蓄」という意味になります。「貯蓄」は次の時代に備えることですから、「次の時代に備えて儉約をしなさい」ということになります。「貯蓄」が増えたら、みなさんも勉強したように経済成長率が高くなりますよね。そういうことをこの資本主義の時代はいいました。

「一生懸命働きなさい。一生懸命働いて経済を強くしましょう。しかし、働いた分を全部消費するな。儉約しなさい。儉約した分は貯蓄として、次の時代の経済を強くするのに役立つから儉約しなさい」という発想であります。この二つの価値あるいは思想、「勤勉」と「儉約」の大事さを言ったのがマックス・ウェーバーという有名なドイツの社会学者で、それが近代資本主義の非常に尊い真髄であるというふうに申しました。繰り返します。資本主義の神髄は「勤勉」と「儉約」であります。

みなさんにぜひとも記憶してほしい人がいます。日本人でも同じようなことを言った人がいました。マックス・ウェーバーは立派な本を書いて、資本主義の神髄は「勤勉」と「儉約」であるといいましたが、日本人の中でも江戸時代に、そのようなことが大切であると言った人がおります。みなさん、二宮尊徳という人をご存知ですか？二宮金次郎といったほうがいいかもしれません。小田原で生まれて、江戸時代に役人として治水などをした人です。その人が、

「人間、生きていくには「勤勉」と「儉約」が大事である」と説きました。二宮尊徳は本の形にはしていませんが、そのようなことをあちこちで言っていたということが、後になってわかったんですね。我々が子供のころは、小学校に行きますと必ず二宮尊徳の銅像がありました。みなさん、若いからそのような銅像は見たことがないと思いますが。どういう銅像かというと、写真やテレビで見たことあるかもしれませんが、薪を背負って本を読みながら歩いている人のものです。写真かなにかで見た人はいますか？見た人がいたら手を上げてください。やっぱりみんな知ってる。よかった。我々の世代は小学校、どこの小学校に行ってもその銅像がありました。日本人よ、「勤勉」しなさい。「儉約」しなさいというのが二宮尊徳の教えでありました。それを学校で生徒に教えるために二宮尊徳の銅像がありました。今の若い学生さんも二宮尊徳の銅像の記憶があるということは、みなさんもそのことを知っているということですから、私は非常にうれしく思います。日本でもそういう思想が非常に大事にされた。と。繰り返します。「勤勉」と「儉約」です。これが二宮尊徳の教えであります。だから、西洋の偉い社会学者のマックス・ウェーバーと、日本の小田原近辺の役人であった人が、同じようなことを言っていたということは、この資本主義の世の中で大事な精神というものは、繰り返しますが「勤勉」と「儉約」であるというふうに言えるかと思います。

もうひとつ、日本において重要な主張をした人がおります。石田梅岩というこれも江戸時代の人です。みなさん学校で日本史を学んだら、昔、江戸時代は士農工商という身分社会だったことは知っていますよね。一番上が武士で次が農民で三番目が工業や手工業をやる人で四番目が商人であるという、江戸幕府はそういう身分社会を作ったわけです。で、商人が一番低く見られていた。ところが、石田梅岩という人は「いや、商人を見くびってはいかん。商売というのは非常に大事な役割だ」と。工業で物を作っても造りっぱなしじゃ何にもならない。それを売って、みんなに使ってもらわなければ何にも役に立たないわけですね。だから、江戸時代では士農工商といって、商売人は一番下の身分

であるからといって見下されるのはいけない、商売とは非常に大事な経済活動だ、といった人が石田梅岩であります。みなさんこれから学校を卒業して商業をやる人もいるでしょうし、製造業に行く人もいると思うけど、今のサービス産業は盛んですから商業をやる人はいっぱいいるでしょう。商業は決して見下されるべき職業ではないということを江戸時代に石田梅岩が言っていて、「石門心学」という言葉で言われるぐらい有名な思想となっているのを覚えておいてください。

商業がなぜ江戸時代に見下されたかといいますと、農業や工業は何か作りますよね。農業はコメを作るとか、工業は手工業で茶碗を作るとか、やかんを作るとか江戸時代で言えばなにか新しいものを作っている。ところが、商業というのはその作ったものを右から左に流すだけだ、という認識があったから商売人は土農工商の一番下にみなされていました。しかし、繰り返しますが、「いや、そうじゃない。商業も人間が生きていくためには非常に大事な経済活動なんだから、尊敬しなければならない」と言ったのが石田梅岩であるというふうに思ってください。これが「4. 東洋の労働観」、特に日本を中心とした労働観です。そこのところに「二宮尊徳の思想」と書いてありますが、私がいま申し上げたようなこと、あるいは石田梅岩のこともいっております。

2. 労働は喜びか

次にいきましょう。「5. 労働は喜びか」。これからが非常に重要な話題になっております。産業革命、イギリスで工場が出来て、機械をいじる労働者がいっぱい出てきましたよね。で、そういう人たちが本当に幸せに働いているか？という疑問が呈されるようになりました。毎日毎日、単純作業ではんだをつけたり、あるいは機械をいじったり、毎日朝から晩までそんなことばかり仕事をしていたらちっとも楽しくない。自分は働くのが嫌だというような人が出てきました。これを我々はちょっと難しい言葉で言いますが、「労働疎外」と

言います。疎外感を感じる。機械の前で毎日、朝から晩まで同じことをやっているとうも辛いと、そういうような声が出てまいりまして、働くというのは喜びなのか、喜びでないのかというような考えが出てまいりました。

そこで、一つの思想として工場で単純作業をやるよりも、自分の意思でなにかを作り出すような仕事のほうがもっと面白いのではないかという思想が出てまいりました。自分の発想で持って何か新しいものを作ると。他人に命令されて単純作業をやるのではなくて、疎外感を感じるのではなくて、自分の発想で、例えばカーテンを作るとか、椅子を作るとか、机を作るとか、そのようなことのほうが人間は働く喜びを得るのではないかという考え方も出てまいりました。それが「職人芸の意義」であります。職人といわれる人の、自分の発想でもって、自分で計画して、自分でものを作る、という仕事が非常に楽しいのではないかという意見も出てまいりました。というわけで、人はなぜ働くのか、喜びはどこに感じるのか、というようなことで職人芸の大切さが出てまいりました。これはイギリスのウィリアム・モリスやジョン・ラスキンが言った思想です。

もうひとつ重要な思想があります。それは「他人からほめられたい」ということで、人間が働く動機として一番重要である価値であるといった人がおります。たとえば、フランスのパスカルなどが言っていることですが、たとえ単純作業であれ、あるいは職人芸であれ、自分の作ったものが他人から褒められたときに、一番幸福感を感じるということをいいました。その幸福感を感じることができれば、どんどん働くことができるだろうといった思想もあります。そういう意味で人間は何のために働くかということに関して、働くことは喜びか？ということに関していろんな考え方があると申しました。

資本主義の時代に18世紀産業革命が起きてから、資本主義がますます栄えて、そして生産量は増え、人々は一生懸命、先ほど言いました勤労の価値、「勤勉」と「儉約」という価値に基づいて人間は一生懸命働くようになりましたが、そこで問題が出てまいりました。それが資本主義固有の問題であります。資本主義、とにかく資本が中心にあって、工場を作って、人をたくさん

雇って、大量生産をやるというのが資本主義ですよ。そこで働く人たちが幸福か不幸かというと、先ほど私がちょこっと申しましたように、「単純な作業ばかりでちっとも楽しくない」という人がいっぱい出てきた。労働に疎外感を感じる人たちが出てきた。

そこで出てきたのが「マルクス主義」という考え方です。みなさん経済学部の学生さんであれば近代経済学とマルクス経済学いう二つの大きな学派があることをご存じだと思います。いま、マルクス経済学は地位を失っていますが、19世紀あたりはマルクス主義というのは非常に盛んであります。カール・マルクスという偉大なドイツの経済学者が出てきて、「資本家、経営者はお金を持っていて工場を作って、その工場に労働者は雇われている。そして、安い賃金で働かされ。労働条件もあんまりよくない。労働者は資本家から搾取されている」ということを言い出して、そこでマルクス主義というのが出てまいりました。資本家は労働者から搾取する、労働者は資本家の犠牲になっているんだ、これはけしからん、という思想がマルクスやエンゲルスを起点にして資本主義の中で増えてまいりました。

そして、マルクスは資本主義を倒さないといけないという主張をしました。それがいわゆる共産党宣言といわれるものに代表されているんですが、労働者は団結して資本家を倒さないといけない。なんでかということ、労働者は資本家に搾取されまくっているからだという論理であります。そしてそのマルクス主義の考え方を、これはマルクス・レーニン主義というのですが、それを実際に実践した国が現れました。「革命をやれ。資本家を倒せ」というような革命のスローガンのもとで、みなさんも高等学校の歴史で、ロシアという国で労働者が立ち上がって、貴族や資本家階級を革命で追い出したという事件があったというをご存知ですよ。まさにマルクス主義の考えを現実を起こさせた例がロシア革命であります。で、マルクス・レーニンの革命というものが成功してソ連という国が生まれて、そのあとそういう共産主義の思想が東ヨーロッパやキューバやその他の国にも広まっていきました。

しかし、資本主義の考え方とマルクス・レーニン主義による社会主義の対立というのが戦前から第二次世界大戦後までずっと続きました。資本主義の代表国はアメリカ、イギリス、ドイツ、フランス、日本などです。一方の共産主義革命による社会主義の国はソヴィエト連邦、中国、東欧、キューバ、ベトナムなどで、戦後はその資本主義国と共産主義・社会主義国が激しい対立をしていました。まだみなさんが生まれる前、1950年代60年代からこの二つのソビエト・ロシアとアメリカを筆頭にして、資本主義国と社会主義国が大変な対立をしていました。政治的にもアメリカとソビエト・ロシアは両方とも軍隊が強いのですから、それこそ核戦争が起きんばかりの対立をこの二つの体制はしていたわけですね。ところが、マルクス・レーニン主義は、「労働者は団結して資本家を倒せ。革命あれ」と言って一部の国は成功しましたが、アメリカやイギリスやドイツやフランスはそういうことをやらなかった。

私も自分の体験をいいますと、1980年代ドイツにいました。ドイツ、西ドイツですよ。私は自由を愛する人ですから、東ドイツには行きませんでした。西ドイツに住んでいて、ただし、東ドイツの人々がどういった暮らしをしているか関心がありましたので、車で東ドイツを旅行しました。そうすると、みんななんとなく暗い顔をしているのですよ。東ドイツの国民は。自由がないなと一目瞭然でわかりました。西ドイツに帰って来たら、豊かなんですよ。皆豊かないい洋服を着て、おいしいものを食べて、家族団らんで楽しんでいるんですよ。西ドイツの自由主義の国、資本主義の国は繁栄しているけど、東ドイツの国に行くと皆暗い顔して、皆貧乏な格好をしていました。残念ながらこれは資本主義と社会主義の国では全く人間の生き方が違うなと、もろに感じた記憶があります。

皆さん車が好きな人であれば、昔東ドイツにトラバントという車がありました。知っている人いますかね。トラバントという車知っている人、手を挙げてごらん。ああ、知っている人が何人かいました。小さな車で、貧相な車で、煙をいっぱい撒きながら走っている、非常に劣悪な車しか東ドイツではないので

すよ。ところが西ドイツは、みなさんベンツだとかBMWとかその他諸々アウディとか、非常に質の高い車が走っているじゃないですか。これもう一目瞭然、西ドイツと東ドイツはもう経済の力が全く違うなというのが分かった。

皆さん、ベルリンの壁というのが排除された事件は知っていますか。みなさんまだ生まれてないな。もう、20年以上も前の話だから。赤ちゃんの頃かもしれない。西ドイツと東ドイツは壁で封鎖されていました。なぜかというと東ドイツの人は皆、自由が欲しいと、豊かな経済生活がしたいと言って、東ドイツから西ドイツへと逃げようとしたからです。東ドイツの政府としては許せないわけですよ。皆西ドイツに逃げられたら困るということで、壁を作りました。ところが、とうとう東ドイツの人達はもう我慢が出来なくて、自分たちでその壁を潰すという行動に出ました。それが、ベルリンの壁の崩壊です。東ドイツの人達は西ドイツみたいに自由が欲しい、もっと豊かになりたいという希望で、ベルリンの壁が崩壊しました。

そうすると、その動きは他のポーランドやハンガリーやチェコやそういう国にも波及しました。東ヨーロッパの社会主義国の人達は「俺たち虐げられている」と、西のように自由は欲しいし、経済も豊かになりたいと思って、他の東ヨーロッパの人達も東ドイツの人達と同じような行動をしました。とうとうそれが、本家のソビエト・ロシアにまで起きました。ペレストロイカとか色んな言葉で最後にソ連邦は崩壊したという事件が起きたのは、もう皆さんご存知だと思います。これもソビエトのようないわゆる共産主義体制じゃなくて、もうちょっと自由が欲しいというようなことをソビエトの人達が思い出した、という歴史的な事件がございました。

しかし、まだ全部の国がそういう国になったわけではございません。超大国中国があります。中国というのは、我々の隣にあるでかい国で、昔は貧乏でしたけど今ものすごく豊かになってきました。ここ20年ぐらい、成長率は10パーセントくらいです。昔日本は高度成長と言って、1950年代、60年代経済成長率は10パーセントという非常に高い時代でしたが、今の中国がそれであります。

で、今の中国は経済成長率が高いから、ものすごく強い国になりつつあります。経済が豊かになりつつあります。

しかし政治的には、共産主義でございます。ここで中国というのは非常に巧みな政策をやっているというようなことを皆さんに申したい。それは、経済は資本主義でいこうと。経済はもう自由に経済活動をやりなさいと、自由に経済活動をやったほうが経済は強くなるというようなことで、資本主義以上の自由経済を中国は導入しました。鄧小平（ダン・シャオピン）という偉大な指導者がいて、そのようなことをやって、中国の経済をあたかも資本主義のように運営して強くなりました。ところが、経済はそうのように自由になったけれども、まだ政治的には共産党の一党独裁で国民に自由はまだないというのが、中国の大陸であります。北朝鮮もそうですが、北朝鮮は中国以上の監視社会、自由のない社会と思います。

今後中国がどうなるかというのは、非常に興味のある事柄です。中国の人達は、経済が豊かになったらきっと自由を欲すると思います。日本人や韓国人やアメリカ人のように自由に生きたいと。しかし政治は共産党の一党独裁ですから、共産党のやる政策に皆従わなければならないという時代ですので、今後中国がこれだけ経済が強くなったけど、政治的に一党独裁が保たれるかどうかまだ疑問符で、どうなるか非常に面白い、という風に言えるかと思います。

3. 人間にとって余暇とは

ギリシャ・ローマの時代から今までの2000年以上の歴史を介して、働くということ、資本主義ということ、社会主義というようなことで皆さんに少し大きな話をしてみましたが、もう少し具体的な話もしてみたいと思います。それが、第2章「人間にとって余暇とは」というところです。

私は、基本的に働くのはつらいことだと認識しております。体は一生懸命使うし、単純作業をやらなくてはいけない人もいますし、面白くない仕事をやら

なければならぬケースもある。しかし、なぜ人間が働くかという、働いて賃金所得を得なければならぬからですよ。働いて稼いで食うために働かなければならぬ。

私は、働くということは食うためにあるんだという風に皆さんも思い込んだほうが楽だと思います。働いて何かいい思いをしたいとか、あるいは出世して社長になりたいと思う人もいてもいいですよ。でも、社長なんかにならなくてもいいと思う人もいるでしょう。多くの人にとっては、働くということは食うためにあると思うと、意外と楽になれます。仕事はつらいけど、働くことによっておまんまが食べられるんだと思ったら楽ですよ。そして、結婚して奥さんだとか子供ができたときは、自分が働いて家族を養うというような事が出来れば、これまた非常に幸せですよ。女の人だってこれから一生懸命働く時代になりますから、自分が働いて食べていけるような生活者になれば、こんな幸せなことはない。というわけで、私が第一に言いたいことは、人間というものは食うために働くんだということです。

そして、余暇が大切であると強調したいです。働いてもつらい、つらいけど何か自分で楽しむものがあれば働いて辛いことも忘れることができるということに気が付いてほしい。要するに自分の好きなこと、なんでもいいです。私の好きなスポーツでもいいし、音楽でもいいし、映画見るでもいいし、なんでもいい。自分の好きな事を一生懸命、自分の働く時間以外でやれば、そこから得られる満足というものは非常に大きいですから、何か自分の好きな事を見つけて、稼いだ分の一部をそれに注げば、これは非常に人生ハッピーだなという風に思えると、私は考えています。

例えば私であれば、稼いだお金全部使って甲子園球場に毎日通ってトラを応援することができれば、私にとっては非常に最高に幸せな人生だと思うのですが、残念ながら同志社大学で経済学を教えないといけなないので、毎日甲子園球場には行けません。でも、稼いだお金の一部を、「さあ明日は阪神・巨人戦で甲子園に行くことができる」と思ったらこんな楽しいことはない。私は実は

タイガースファンなものですから、阪神とソフトバンクが福岡ドームで日本シリーズを戦ったのを見たことがあります。何年ぐらい前かは覚えていませんが、私はどうしても福岡まで来て、福岡ドームで阪神とソフトバンクの日本シリーズを見たいと思って、通いました。これ、私が好きな事が出来たわけですよ。日本シリーズのトラの試合を、福岡まで来て見る事が出来た。自分は同志社大学で教えて賃金を稼ぐことができたから、福岡まで野球を見に来ることができたわけですよ。まあ、私が同志社大学で学生に経済学を教えることはつらいとはいいいませんが、これは義務なわけで、それがないと所得をもらえないわけですから、生きるため、食うために私は経済学を教えているのです。その稼いだ分で福岡まで飛んできて、ソフトバンクとタイガースの試合を見られたので、私は非常に幸せでありました。ということで、私は自分の好きなものを見つけて、稼いだものの一部をそれに注いで、「はあ、これで自分は幸せだな。これはいい人生ではないかな」という風に思います。

一つの逸話をご紹介します。この逸話から働くということの意義をわかってと思いますので。私は「働くということ」というような題材で、あるテレビ番組に出演しました。みなさん、カンニング竹山という人をご存知ですか。知っている人手あげてごらん。ああ、彼は福岡出身なんだ。そうさそうさ。私はカンニング竹山氏と30分くらい、働くことということで対談しました。そして、私はカンニング竹山さんにこういう質問をしました。「竹山さん、あなた3億円宝くじ当たったら今の仕事やめますか」と。彼はどう答えたと思う。「やめません」と言った、ずばり。彼は今の仕事が好きって言いました。皆の前で芸をやって、皆が喜んでくれた、先ほど言ったパスカルの褒められたいために人は働くと言ったことを彼は地で言っているのです。自分は芸をやってみんなに喜ばれたらこんなうれしいことはないと言いました。

私はそういう気持ちで働く人はいてもいいと思います。要するに皆に褒められたいと、そして働くことが皆を楽しませるのであればそれは非常にハッピーだから、彼は3億円の宝くじをもらっても働き続けると言いました。私はこう

言いました。「私は同志社大学辞めます」と。「えっ」と言ってカンニング竹山さんはびっくりしたので、私はなんと答えたかという、「3億円あったら食っていけるから、もう仕事はやめて毎日甲子園球場に通います」といいました。テレビの番組で、残念ながらカットされました。そこでやっぱり、局がNHK教育テレビなので、そんな発言は乗せないというのは当然わかったのですが。ああいうテレビ番組では2時間ぐらい対談して、オンエアーするのは4分の1なんです。30分ぐらいしか放映されなくて、その中でNHKはタイガースの言葉出すかなと思ったら、残念ながら出てきませんでした。

これは、人によって働くということの価値観の違いを表しているという風にみなさんわかってください。私がこの例を挙げたのは、人間って自分の好きな生き方をすればいいんだということです。竹山さんには竹山さんの生き方がある、私には私の生き方があると。あの仕事はちょっと面白くなくてつらいと、仕事だけしかできない人は余暇に生きがいを見つけて、自分の楽しいことに人生をかけることができれば、もう働くことの苦しみってというのは、相当和らぐのではないかなということを私は申したいと思いました。従いまして、第二章では余暇というのが非常に大事であるということでございます。

4. 結論

結論に入ります。私はここまで1時間ぐらい、働くということをいろんな哲学者がどう考えたか、あるいはどんな生き方があるのか、橘木の生き方、カンニング竹山の生き方、色んな生き方があると申しました。皆さん、働くということは基本的にはつらいことだというのは認めましょう。しかし、「働かざる者食うべからず」という哲学もあります。働かない者は食ってはいけない、これは資本主義の世界でも、マルクス主義の社会でも当てはまる原理であります。

マルクスは言いました。「働かざる者食うべからず」と言いました。社会主義の国でも働かないと食っていけないんだと認めました。資本主義は当然働か

ないと賃金、所得が無いから食っていきません。しかし、働くということは不幸にしてつらいことだらけです。面白くない仕事はあるし、上役から怒鳴られることもあるし、職場では嫌な奴がいるかもしれない。そんな働くということに関して、幸せってそんなに感じられないということは人間の社会には多い。しかし働くことによって食っていったら家族は喜ぶし、子供も喜ぶし、奥さんも喜ぶし、女の人であつたら旦那さんも喜ぶと、こんないいことはない。そして自分が好きなものを見つけて、そしてそれに余暇の時間を没頭できるような人生を送れば、私は人間として非常にいい人生を送れるのではないかなというように思います。

そしてそういう具体的な働き方に関して、本の第4章では女性の労働をとりあげています。ここに女性の方もいっぱいおられますが、昔は専業主婦というものがありません。旦那さんが働いて、奥さんは家事育児をやるというものでしたが、だんだん女性も働く時代になっている。じゃあ女性はどう働いたらいいのかというのをこの第4章では論じております。それと第5章では、みなさんのような若者で、働こうにも職がない、仕事がないときにどうしたらいいか。政府が色んなことをやらなければならないということを書いております。

今日は皆さまに、働くというようなことを題材にして、いろいろ私が日頃考えていることや、発表していることをこの本に立脚して述べさせていただきました。どうもご清聴ありがとうございました。

＜質疑応答＞

齋藤准教授 橘木先生貴重なご講演どうもありがとうございました。皆さんも聞いていて非常に意外だったと思います。働くことというタイトルだったにもかかわらず、余暇のことについて力を入れてお話しされていました。つまり、人生働くことが全てだという考え方は、経済学的に見ても間違いなんですね。ある程度食うために働く、あるいは余暇を楽しむために働くという考え方、こ

れが人間の本音ですよ。そこに目を向けていくことも大切なのかな、と私は考えました。それでは、何か質問はありますでしょうか。

質問 (経営学科3年 石田さん) 経済学部経営学科3年の石田と申します。よろしくお願いいたします。僕は先生の考え方と違って、働くことが楽しかったらそれだけでも結構充実した人生を過ごせるのではないかなと思うんですけど、それについてはいかがでしょうか。

橘木教授 いやいや、カンニング竹山さんはそうですから。自分が働くことにもの凄く生きがいを感じているわけですよ。皆の前で芸をやって、皆が喜んでくれたら彼はものすごくハッピーなわけですよ。そういう生き方したい人はすれればいいというのが私のスタンスです。ところがそういうことを、職場や仕事で見つけられない人も結構いるじゃないですか。カンニング竹山さんは芸人だから、しかも有名だから彼はよかったけど、プロ野球の選手にしろ、芸人にしろあんな超一流になれる人なんてそういないじゃないですか。そういう人はどう考えたらいいかというと、働くのは食うために徹しよう、そしてお金を稼いだらその一部を自分の好きなことにお金を回せ、余暇を楽しみなさいという。だから人それぞれの生き方があるということを私は申し上げたかったのですが。それはどうですか。

石田さん わかりました。

橘木教授 よかったよかった。分かってもらえて。

質問 (経済学部 西山教授) 今、先生が強調された余暇が大事であるという考え方、生き方ですね。そのお話は大変よく理解できるものです。余暇を大事にしましょう、仕事で競うために価値を見出さなくてよいというような立場ですよ。

橘木教授 価値を見いだせる人は見出してくださいということですよ。

西山教授 実際に今、日本でも他の国でも、働く人の大部分というのは、企

業、会社と呼ばれるところで働くわけで、特に現在の日本はそうですが、コストやリスクの負担を企業自らが負担するのではなくて、働く者に転嫁するということをやっているわけです。つまり、非正規雇用の拡大であったり、人件費の負担も働く者に転嫁してコストを浮かせているわけで、もし先生のおっしゃる働くことが食うためのものだ、余暇を大切にしろという考え方が一般化するとしたら、働く者たち自身の側で、このようなコストやリスクの転嫁を受け入れやすい意識が定着することになるので、こういう企業のリスク転嫁のあり方ってというのが社会的に構造化したり、社会的に確立したり、定着するということはあると思いますか。だとすれば社会や企業のあり方に歪みというか、あまり望ましいあり方ではないですが、それについてはどう先生はお考えですか。

橋木教授 今の先生の質問を私流に解釈いたしますと、働くのは食うために徹しろ、働くのはほどほどでいい。そんな考え方の人間が沢山出てきたら日本経済は駄目になるんじゃないかというご質問ですか。

西山教授 必ずしもそうではないと。企業や社会のあり方という点で、そういうある意味歪な在り方というのが肯定されてよいのかという関心です。

橋木教授 じゃあ、歪な在り方というのを私流に解釈すると、非正規労働者ということで、たぶん労働条件の恵まれた労働者と、労働条件の恵まれていないパートタイマーだとか、契約社員とかとの格差が広がってもいいのかというお話と理解してもいいですか。

西山教授 そういようなお話で、はい。

橋木教授 それは私の本の第6章で書いてあります。今日は時間の関係で一切触れていませんが、例えば人間が少なくとも働く、働かんといかんと思うくらいの報酬は出せと。その一つの例で、最低賃金というものがございます。最低賃金というのは、一人の労働者が1時間働いたらこれだけ出せということを決めた法律です。これを私はもっと上げろという主張をしています。非正規労働で働く人の最低賃金は非常に低いし、本当に苦しくてすぐにでも仕事を辞めたいと思う人がいっぱい出てくる可能性がある。そういう人の勤労意欲を失わ

ないようなレベルまで最低賃金を上げろと、主張しております。そういう意味で、今日本は歪な社会になっています。正規労働者は非常に恵まれた条件にいる。非正規労働者はそういう条件にいないけど、非常に働きづらい状態を続けるのはいけないと、主張しております。これで納得していただいたかどうかはわかりませんが、こういった主張を私はしております。

質問(経営学科 ホセさん) 経営学科2年のホセと申します。会社で働くことがつらくなった時でも、それは食べるためだからと我慢したらいいですか。それとも他の仕事を探す方がいいですか。

橘木教授 それは両方あり得ますよね。今の仕事はつらいけど家に帰ったら奥さんと子供が待っていると言ったら働くかもしれない。しかしそれ以上つらいんだったら、退職して次のいい仕事を見つけるということを考えてもいい。私はどちらもいい考え方だと思うから、その人が独自で判断して転職を考えるか、今の企業で働くかを判断すればいいと思います。

質問(経済学部 上坂准教授) 経済学部の上坂と申します。本日は講演ありがとうございます。同じところに質問が集中して恐縮なのですが、働くことに価値を見いだせなかったら余暇を楽しめばいいというのは、少なからず学生が結局天職と思える仕事につけるわけがないと、そういう学生に対してあまり思い詰えずに、という優しいメッセージなのかなと解釈しましたが、その一方で十分に余暇を過ごせるような興味のある対象を見つけられない人間もいるわけではないですか。

橘木教授 お金が足りないということですか。

上坂准教授 お金が足りないということだけではなくて、私が学生と話していて必ずしもとは言いませんが、なにがやりたいのか、何が興味あるのかという決めていないと。じゃあ普段何やっているのかというと、テレビゲームで時間をつぶしているという。それが本当にやりたいことかということ、そうじゃな

い。それは本人も自覚している。先生のように、野球観戦に熱中するというような自分にとって価値のあるようなことを見いだせない人間も一方でいるわけですね。そういう人間に何かメッセージがあればお願いしたいです。

橘木教授 私はゲームやってもいいと思いますけどね。食って行けるならそれこそ仕事終わって帰ってゲームを2時間、3時間しても本人がそれで満足するならそれでいいと思いますけど、なぜゲームがだめですか。

上坂准教授 だめというか、意外と本人がゲームをやりたいかというところほど考えていないんですよ。

橘木教授 なら寝てればいいじゃないですか。寝るのが趣味でもいいじゃないですか。食っていけることが大事ですから。寝るのが趣味っていう人も絶対いるわけですから、ゲームするよりも寝てればいいじゃないですか。

上坂准教授 わかりました。ありがとうございます。

齋藤准教授 それでは、お時間になりましたので私の方から閉会の辞を述べたいと思います。橘木先生、改めてご講演と質問へのご回答ありがとうございます。

私が言いたいことは、大学は一生の趣味を探すための時間だと解釈できるということです。仕事に就くと労働時間が決められますし、サービス残業もあるから、趣味といっても疲れてできないという人も多いです。若い連中はこき使われますから特にそうですし。その場合は、寝ることが趣味でも仕方ないと思います。だからこそ、できるなら今大学にいるこの時間で、一生の趣味を見つけたいと思います。そのためには、一生の友達を作りたい。働く方でも余暇でもハッピーであれば人生万歳ですけど、働く方がうまくいなくても余暇の方でハッピーになる道もあるんだということを、今日の講演の一番の教訓と思ってください。それを実行するには最低限食っていけるだけの稼ぎがないといけませんから、そのためにぜひ就職活動がんばっていただきたいなと思います。以上で経済学会学術講演会を終了いたします。